雪の季節とアスファルト

池の田んぼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪の季節とアスファルト

【Ｎコード】
Ｎ６１９６Ｋ

【作者名】
池の田んぼ

【あらすじ】
何気ない『日常』を書いた作品です。
ある１日を主体にして、３人の人物からの視点で、物語を描きます。

佐藤秋文

窓が曇っていることに気が付いた。外が白く見える。いつもは、赤色のような山の木々が見えるのだが、今はあまりよく見えない。

「ここでもえー…議会をつくる、えー、そしてオーストリア…」

退屈な世界史の授業が始まり、２５分が経つ。

「パサン」

先生の声しか聞こえない静かな教室で、音がした。音の方向に目を向けると、金田悠矢が教科書を拾い上げているのが目に入る。

「ガッシャーン、カラカラカラカラ。」

さっきより激しい音がした、金田悠矢は今度は筆箱を落としたらしい。みんなの視線が金田悠矢に集まる。俺も金田悠矢に視線を向けた。

不意に、金田悠矢と目が合う。金田悠矢はこっちを見て笑っていた。

金田悠矢は、天然なところがあり、ハプニングを引き起こしやすい体質であるのは、周知の事実であった。

俺も金田悠矢に笑い返す。

何秒か後には、みんな金田悠矢から視線を戻していた。俺も笑いながら視線を前に戻した。視線を戻すと、机の上に見覚えの無い白い紙が数枚出ているのに気付いた。

池田広木

塾のテストが終わり、友達と2人と外に出た、雪がチラチラ降っている。

とんとん拍子に事が進み、気が付くと、友達の携帯電話を片手に、前田未来さんの自宅へと電話をしていた。

「テゥルルルル……テゥルルルル……」

電話のコール音が続く。コール音が続くごとに、「今ならまだ間に合う」「こんなことはやめてしまおう」と訴え掛けてくる自分の権力が増していく。防具は無く、槍のみでラスボスに挑むようなものだという事は、どの自分も自覚していた。

「もしもし、前田ですけど。」

「え…狭葉中学校、3年1組の池田広木ですけど、前田未来さんいらっしゃるでしょうか。」

鼓動が一気に速くなった、後から思えば、このとき俺の周りだけ雪が溶けていても不思議じゃないように思えた。前田未来さんの母親が電話に出たというイベントで、俺の槍の矛先の欠ける音が聞こえた。

「あっ、はい、今代わりますね。」

そう言うと、電話に音楽が流れ始めた。その音楽の軽快なメロディーとは裏腹に、不安がどんどん募る。

「もしもし…」

「あっ、狭葉中学校3年1組の池田だけど、前田さんですか。」

「はい…」

自分は、前田未来より1つ年上なのだが、どうも女の子を呼び捨てにするのは苦手らしく、「前田さん」と呼んでしまう。

「今から外来れる。」

何気ない口調で言うことが出来て、緊張しか感じていなかった僕の心に少しの喜びを感じた。

「え…、あ…、今はちょっと、行けないです…。」
「…そっかぁ、急に変なこと言ってごめんね。全然大丈夫だから、気にしないでね。」
自分が槍だと信じていたものが、単なる木の枝だったということに気付いた。同時に今まで気付かないふりをしていただけだという事に気付かされた。
「はい……、すみません。」
「いやいや、本当に大丈夫だよ。いきなり言った俺が悪いし…」
このとき、自分の中のラスボスに勝利した。たぶん、電話をかけた時点で勝利していたのだろう。
「嫌だったら、全然断っていいんだけど、本当に、全然断っていいんだけど…」
つい防衛線をはってしまう。テストが終わり、点数が悪かったときのショックを和らげるために、「全然出来なかった」と周りの友達にあらかじめ言っておくのと同じだ。自分の弱さが出てしまう。
「俺、前田さんのことが好きです。付き合ってください。」
「え……、あ……」
沈黙が続く。結果は見えているのに、まだあるはずのほんの少しの希望を信じている自分がいることに驚く。そして、結果は見えているはずなのに、僕の心は、なおも、緊張と不安を感じている。
「あっ、全然気楽に考えてね、全然断って大丈夫だから。」
沈黙に耐え切れず、つい言葉を発してしまう。さらに防衛線をはる。自分の弱さに嫌というほど気付かされる。
「……ごめんなさい」
電話から聞こえてきたのは、本当に申し訳なさそうな「ごめんなさい」だった。
「あぁ、やっぱりかぁ」内心でそう呟く。
「あっ、全然大丈夫だよ、急に変なこと言ってごめんね。全然気にしなくていいから。」
自分の不甲斐なさが嫌になる。何が「全然気にしなくていいから」

だよ、この偽善者ヤロー。
「……ごめんなさい」
再び電話から聞こえてきたのは、本当に申し訳なさそうな「ごめんなさい」だった。改めて俺は…。
そんなことを2時間目の化学の授業に思い出していた。昨夜、前田さんからのメールが届いたことが大いにそのことと関係してるだろう。

池田広木（後書き）

もしよければ、評価や感想を書いていただければ、とても嬉しいです！！　できれば、よろしくお願いします。

池田広木

メールの内容によれば、先日、高校の合格発表があり、前田さんは見事第一志望校に合格したらしい。という事は、来月からは、また俺の後輩になるということだ。その小さな出来事が、小さい俺に、少しの目に見えないエネルギーを与えた。

あの告白の日から、約1年、正確には1年と2ヵ月後に、誰が、前田さんとこのような平和なメールができると予想しただろう、いや、誰もしていない。はずだ。

Ｔｏｗｏｒｒｏｗ　ｎｅｖｅｒ　ｋｎｏｗｓ　ってか、これだから、人生は…。

そんな俺とは裏腹に俺の隣の席の、佐藤秋文は、今日も元気が無かった。いつも通りと言えばいつも通りなのだが、どこか暗い。時折、暗い顔もしている。佐藤秋文と親しくないと、ここ最近の変化に気付けないだろう。

何気なく左に目を向ける、佐藤秋文は、時折見せるあの暗い顔をしていた。改めて佐藤秋文を見ると、背は小さいが、整った顔立ちに、スポーツマンを思わせる短髪。佐藤秋文は男子バスケットボール部に所属していて、実際、バスケットボールは上手いらしい。俗に言うイケメンというやつだろう。

俺が、佐藤秋文の元気の無い理由をわかったとしても、俺が言えることは何も無いだろう。過去と他人は変えられないが、未来と自分は変えられるってやつだ。

当たり前のことが当たり前ではなくなるときが来る。本当の変化とは、常に想像の枠に収まりきらない。わかっていても、何も出来ない。どこか、もどかしく空しくなる、それと似た感覚に襲われる。

俺が出来ることなんて本当は何も無いのだ、それでも何かしようとする、それが人間の部分だと信じているからだ。

サンテグジュベり曰く、「人間であるということは、自分には関

係がないと思われるような不幸な出来事に対して、　忸怩たることだ」だ。

そんなことを考えながら、池田広木は、化学の時間にこの小説を書き上げた、それでも何とかしようとするために。

後は、隣の席の佐藤秋文にこの小説を渡すだけだ。

金田悠矢

気が付くと、教科書を落とす準備をしていた。
２時間目の化学の授業が終わり、今日は午前授業なので、あと２時間で退屈な授業とお別れできると思うと、少しスッキリとした気分になる。
授業と授業の間のこの１０分の休み時間は、本来、次の授業の準備時間として活用されるためにあると聞いたことがあるが、そのように活用する生徒はほとんどいない。次の時間があの退屈な世界史とあってか、なおさらそのような生徒がいないように感じる。
「悠矢、悠矢」
俺を呼ぶ声が聞こえて、後ろを振り返ると、そこに池田広木がいた。
「何だい？」
池田広木の顔が、急に真顔になった。深刻そうな雰囲気を漂わせている。そして、口を開く。
「あのさ、悠矢に頼みたいことがあるんだよね。」
池田広木は、くだらない奴だ。別に悪く言っている訳ではない、ただ本当にくだらない奴なのだ。
池田広木が、真顔で何か言うときは、９９％と言っていいほど、たいしたことではない。
「何だい？」
笑いそうになるのを堪えながら、俺も真顔で返事をする。
「次の世界史の時間に、少しの間みんなの注意を引くことをやってくれない？　悠矢、そういうの得意じゃん。」
池田広木が、一転してにこやかに言う。
「えー、何で？　大体、俺そういうの狙ってやってないからね。」
俺は、何かとみんなの注目を集めることをしてしまうらしいが、別に狙っている訳ではない、毎回たまたましてしまうのだ。

「何でかと言うとね、うーん、そうだな…　例えば、悠矢が知ってる人が描いた絵と、知らない人が描いた絵、どっちの方が見てて面白いと思う？」
俺は、少し考えた。
「知ってる人が描いた絵かな。」
「俺も知ってる人が描いた絵だと思う。知ってる人が描いた絵は、描いた人を知っているから、色々なことを思う、だから面白い。知らない人が描いた絵は、絵だけしか見えない、だから、知っている人が描いた絵と比べると、あまり、面白くはない。そう、それだ。」
「どれだい？」
俺は、笑いながら聞く。
「俺は、絵だけを見てもらいたい。」
俺は、困った。話が全くわからなかった。
「絵だけ見てもらうために、俺が、みんなの注意を引くってこと？」
「そういうことです。」
池田広木が、笑いながら言った。
「あっ、あと、俗に言う、サプライズってのも兼ねてる。」
池田広木が、またも、笑いながら言った。
「えー、やだな、やりたくない。」
俺は、初めから断ろうと決めていた。
「悠矢なら、狙っても許されるって。てか、悠矢しか、許されない。」
なおも、池田広木は説得しようとしてくる。
「それでも、やだな。」
「なら、じゃんけんしよう、俺が負ければ、きっぱり諦めるし、悠矢が負ければ、悪いけど、やってもらうってことで。」
池田広木が提案してきた、俺は、頼まれているのだから、俺のほうが立場的に上のほうなはずなのに…
「じゃんけんしないとだめ？」

一応俺は聞いてみた。
「流石にね。」
池田広木が笑いながら言う。
俺は、観念した。いつもといえば、いつも通りなのだが、なぜだか、じゃんけんをしないと相手に悪い気がして、つい、じゃんけんをしてしまう。
「わかった、わかった、負けたら、きっぱり諦めてよ。」
「おう」
そして、じゃんけんが始まった。
最初はグー、じゃんけん……
そして、気が付くと、教科書を落とす準備をしていた。

金田悠矢（後書き）

もしよければ、感想や評価を書いていただくと、嬉しいです！

金田悠矢

退屈な世界史の授業が始まり、２５分が経つ。
この２５分間、注意を引く方法を色々と考えていた。なんだかんだで、やはり無難なものが一番だろう。
とりあえず、教科書を落としてみる。
「パサン」
静かな教室に、音を発信した。
音が小さいせいなのか、とてもみんなの注目を集めたとは言えない。
「どうしよう？」内心で焦る。
何食わぬ顔で、落とした教科書を拾いながら、思う。出来れば二度と故意に教科書を落としたくないと。
そんなことを思いながら、教科書を拾い上げたとき、
「ガッシャーン、カラカラカラカラ。」
さっきより、激しい音が発信された。発信源は、再びここだ。
どうやら、教科書を拾い上げたとき、机の上にあった筆箱を落としてしまったらしい。
みんなが、こっちを向いた。みんなの注目を集めたと言えるだろう。
池田広木の方を見る。池田広木の隣の席の佐藤秋文もこっちを向いている。
池田広木が、佐藤秋文の机に何枚かの紙を素早く置くのが目に入った。置いた後に池田広木がオーケーサインをしながら、こっちに笑いかけてきた。思わず俺も笑ってしまう。
にやけた顔のまま筆箱と飛び出てしまったいくつかのペンを拾いあげ、そして、寝た。

佐藤秋文

見覚えの無い白い数枚の紙に目を通す。文字がびっしりと書き込まれていた。

書き始めはこうだ、

「窓が曇っていることに気が付いた。外が白く見える。いつもは、赤色のような山の木々が見えるのだが、今はあまりよく見えない…」

どうやらこの紙に書かれているのは、小説のようだった。どういう訳か俺や俺の友達が小説内の人物として登場している。

何気なく右を向いてみる、池田広木が真顔で黒板を見つめている。

ついつい口元がにやけてしまう、池田広木は間違えても真面目に世界史の授業を受けるような奴ではない。

ということは、この紙を置いたのはたぶん池田広木だろう、でも、池田広木が真顔で黒板を見つめていなくてもこの紙を置いたのは池田広木だと思っただろう。

この小説を読み終えたのは、世界史の授業が終わる5分前だった。

内容は別に面白くも何とも無かった。ただ、自分や友達が登場しているという、面白みはあった。

ふと、窓に目をやると、いつの間にか窓の曇りが晴れているのに気付いた。外は明るく、いつものように、赤色のような山の木々が見える。

佐藤秋文（後書き）

もしよければ、感想や評価をお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6196k/

雪の季節とアスファルト

2010年10月17日01時43分発行